

た車を作ってくれるとのこと（写真 6）。

日本においても少年院などの更正施設の存在意義や実態は、脚色されたメディアによる間違っただけの印象や、事件発生後の感情論が先走り、正しく理解されていない。日本では、概して少年院や児童福祉施設は、一般社会に対して閉ざされている側面がある。一方、途上

国では、法の整備や社会制度上の保障は追いついていない傾向にある。青少年更生施設に照準をあて、法的側面と社会福祉的側面の両面からの分析を行なうことにより、途上国における現行の社会制度と子どもの教育システムにおける問題点を明らかとすることを今後の課題とする。

イノシシを通じた島と島との交流

—「第 2 回カマイ（イノシシ）サミット」の報告—

蛭原 一平*

11 月に入ると北風が強くなり、長袖が必要な日も多くなる。曇りがちの日が続く。沖合の波も高くなる。晴れ渡った紺碧の空に群青の海、といったような南国の趣はあまり感じられない。そんななか集落のあちらこちらから、イノシシ捕獲用の罠をつくる音が聞こえ始める。ここ沖縄・西表島にイノシシの時期がまたやってきたのだ。

沖縄でイノシシというのは、あまりピンとこないかも知れない。しかし、奄美諸島や沖縄島、そして石垣島や西表島といった、面積が比較的大きく、森林の広がる島々にはイノシシ（リュウキュウイノシシ）が棲息し、古くから狩猟され（写真 1）、暮らしのなかで利用されてきた。そのような琉球列島における人とイノシシとの関わりを見つめ直すとい

うサミットが「亥年」にちなみ 1995 年、沖縄島最北端の集落、奥^{おく}でおこなわれた。それは、大学など研究機関による企画でもなければ、地方自治体など行政が主導となった催しでもなかった。農家や猟師の人たちをはじめ、日頃イノシシに関心を寄せる地元有志が、個人的に親交のある研究者たちと一緒にやっておこなったものだった。

それから干支で一週りした 2007 年 12 月、2 回目の「カマイ（イノシシ）サミット」が西表島祖納^{そない}で開催された（「カマイ」は西表方言でイノシシのこと、当日の会の様子は八重山毎日新聞（2007 年 12 月 17 日朝刊）、沖縄タイムス（同年 12 月 21 日朝刊）、奄美新聞（同年 12 月 24、25 日朝刊）など地元新聞で紹介されている）。琉球列島における

* 国立民族学博物館（外来研究員）



写真1 イノシシを運ぶ猟師 (著者撮影)

イノシシの利用と狩猟をテーマとし、西表島を中心に調査研究をおこなってきた筆者は、会の準備や当日の進行をお手伝いさせていただいた。そこで、そのような12年に1度、亥年にのみおこなわれるという、ちょっと変わったサミットの内容や様子についてここに紹介したい。

このイノシシサミットは「サミット」と銘打っているものの、何らかの社会的な働きかけについて話し合うような会議ではない。かといって、イノシシに関連させた単なるお祭りイベントでもない。研究会など学術的な部分も含み、さまざまな分野の研究者や他の地域の人たちと交流することでイノシシに関する情報の交換を図る。と同時に、狩猟や利用といった各地の生活文化について参加者が相互に理解を深め、将来的なイノシシとの関わり方の在り方を考えるというのが大きな趣旨である。そのため、研究者が一方的に情報を発信するのではなく、たとえば今回だと、各島の現役猟師をお招きし、それぞれの島での狩猟の現状について紹介してもらった。また、

座ってばかりでなく野山に分け入り、イノシシから農作物を守るため琉球王府時代に築かれた石垣（猪垣）の巡検もおこなわれた。もちろん、利用の文化を知るためには実際食べることも重要で、たくさんのイノシシ料理が用意されたし、人によっては早くから島を訪れ、捕獲されたイノシシの解体現場を見学していた。つまり、このサミットは研究会だけにとどまらず、体をも使った学びの場であったといえるだろう。

当日は、島内や石垣島、そして沖縄県内外から多数の参加者が集い、開催集落の方々以外だけでも70人を超えた。そのなかには全国から駆けつけて下さったイノシシ研究者も含まれる。開催挨拶の後、1日目の午後は、「リュウキュウイノシシは一つのグループとしてまとまるか」と題した黒澤弥悦氏（岩手県奥州市牛の博物館）の講演を皮切りとし、計10名の演者（筆者も含む）による5時間以上にも及ぶ研究発表会がおこなわれた。その内容は、リュウキュウイノシシを含むイノシシ（*Sus*）属の系統分類に関する研究や考古学的研究、そして、沖縄島、西表島、台湾、中国でのブタも含んだイノシシ属動物との関わりとその歴史、さらには狩猟が地域個体群に及ぼす影響といった生態学的研究など多岐にわたるものであった。

その後、参加者一同がイノシシ料理に舌鼓をうち、泡盛に軽く酔ったところで、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島そして台湾という5つの島の猟師たちに登壇してもらい、酒を交えてのパネルディスカッションが始まった（写真2）。すでに狩猟歴史何十年にも



写真2 猟師たちが会した当日のパネルディス
カッション (島袋綾野氏撮影)

なる猟師たち、パネラーの止まることのない
語りにフロアの聴衆は魅了され、会が締めら
れたのは夜中の 10 時をまわっていた。

これらの島々では狩猟に関する儀礼や技
術、利用方法そして現在の狩猟状況など異なる
点も多い。各パネラーが、自分たちの狩猟
の文化的背景を紹介しつつ、猟実践と観察に
基づいた、イノシシの行動生態に関する知
識の一端についても言及した。それら語り
のなかには、イノシシを獲るという点に関
し、心構えなど猟師の心性には共通した部分
もあるのだということを実感させられるもの
も少なくなかった。たとえば、西表島の猟
師、那良伊孫一氏が「罾を仕掛けるのは獣道
ですが、やはり目線をです、イノシシの目
線にならなければ、イノシシの気持ちになら
なければイノシシの道が分からない」といえ
ば、台湾のパイワン族猟師、サキヌ氏もま
た、多く獲れる猟師の素養として「自分がそ
の動物になり、その動物の目になって、その
動物の習慣をよく知ることを挙げた。さら
に、何人ものパネラーの口から出てきたのは
イノシシへの感謝であった。父について小学

生の頃から西表島の山中へ猟に出かけていた
那良伊氏は、「生まれた頃からイノシシにお
世話になってきました。もしかしたら西表島
にイノシシがいなければ、祖納の人も西表島
の人も途絶えたのではないかと。それくらい
イノシシに大変感謝しています」、「何よりも
イノシシを大事にしてもらいたいです。山が
あるから、海があるから、森があるからイノ
シシがいて、その結果、我々もこの島に生き
れるんだ」と、いう。奄美大島の猟師、四本
龍太郎氏もまた、今もおこない続けている正
月十六日の山の神様へのお参りなどを紹介し
ながら、こう語った。「ブタの尻尾は先が丸
いですが、シシ(イノシシ)の尻尾の先は
ぺっちゃんこになってます。そのシシの尻尾
の平たいところを山の神様がいつもこう掴ん
でおって、猟師に、信仰心のある猟師にです
よ、『はい、次はおまえが行って、あの猟師
にヌサレさせてこい』っち、『ヌサレ』って
いう言葉は頂くとか、授かったとかそういう
特別な言葉なんです。(中略)やっばり山を
汚さず、山の神に感謝をしながらヌサレを頂
かにかいかんじゃないんかということは親父
に徹底的に教育受けました。」

しかし、このような意識が近年では、共有
されにくくなってきているのかも知れないと
いう声も聞かれた。それに対し、サキヌ氏か
らは、ここ数年主催してこられた獵人学校と
いう取り組みが紹介された。村の青年団の
人も含め、子どもたちを山中に連れて行き、
そこでの 10 日間程の生活を通して自身が教
わってきた猟師の精神や、同じ土地にいる人
間とお互いともに生きていくことの大切さ



写真3 猪垣の見学（尾方司氏撮影）

を教えるという。「今の子どもたちは、インターネットに夢中で山のことも忘れかけてきていますから」と。

会が締められたあとも、猟師たちや参加者が一緒になり、遅くまでイノシシ談義に花が咲いたのはいうまでもない。

2日目は猪垣の見学（写真3）のあと、意見交換会がおこなわれ、参加者たちは今回のサミットを通して気づいた島々の文化や歴史の違いなど、めいめいの感想を述べた。また、狩猟獣でありながらも害獣として、暮らしのなかで深く関わり続けてきたイノシシだからこそ、このサミットのように研究者も地元住民も一緒になり、地域での歴史や文化を踏まえたつきあい（保全と活用）を考えていく必要があるのだということも改めて確認された。そして、そのための取り組みを互いの交流のなかで育てていくことを期し、次回以降のサミット継続が約束されたのであった（さすがに12年後というのは長すぎるのではという意見が大半を占めたが）。

開催後、実際に、サミットで知り合った猟

師のところを訪ねる研究者もでてきた。また、サキヌ氏らパイワン族の人たちが翌年（2008年）に西表島を再訪し、逆に祖納集落の住民が彼らの村を訪問した。このサミットを機として、国境をも越えた交流が芽生えたのである。野生生物の保全管理において地域住民と行政や研究者との協働の重要性が指摘されるが、このイノシシサミットのように、住民たち自らが研究者らとともに企画し、民間での交流を通してこれらの問題を考えようとする取り組みが10数年も前からおこなわれていたことは注目すべきだろう。

また、今回のサミットは、日頃、調査でお世話になっている人たちに自分の研究を直接伝える貴重な場となったことも、個人的な意義として付け加えておきたい。上手く十分に伝えることができたとは到底思えないが、それでも準備や発表を通し、それまで教えてもらわばかりの、ある種得体の知れない存在からわずかでも変わることができた気がする。現地の人に教わるばかりでなく、また、研究成果を伝えてそれで終わるのでなく、何度もそのような働きかけを重ねていくなかで紡ぎだされるであろう対話というものもフィールドワークにおいて大切なのではないだろうか。次回の開催地はまだ決まっておらず、奄美大島かも知れないし、それとも台湾になるかも知れない。それでもフィールドワークを続け、島と島との交流の輪のなかに加わっていければと思う。